

# 三河アララギ

平成三十年 2018年

二 月 号

第 六 十 五 卷      第 二 号



ニューヨーク日記(136) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

## Blue Shoe Diaries

---



え～予定変更!もう決まった写真撮ってたんだけど。。やっぱりバンドネオンからアルゼンチンタンゴを家の"リビングルーム"で聞いてしまうと血が騒ぐよね～ がははなんちゃって  
チョット内緒だけどさ～ラ・クンパルシータが流れた時ShoeLady涙ぐんでたような気がする。しー!

---

So, I already had my photo of the day, but I had to make a change of plans once I heard Argentine tango coming from a bandoneon (similar to an accordion) at our "living room". You know, the Argentine passionate blood calling (LOL). This is between you and me but when they played "La Cumparsita" I saw tears in Shoe-Lady's eyes. Hey, she is una porteña after all.

# 目次

## 第六十五卷第二号(通卷七七〇号)

|                |                |            |                  |
|----------------|----------------|------------|------------------|
| 表紙・みかん         | 今泉 由利 (1)      | 吉見 幸子 (26) | 山迫 京子 (37)       |
| ニューヨーク日記 (136) | Blue Stone (2) | 牧原 正枝 (26) | 森岡 陽子 (37)       |
| 黄素馨の門          | 御津 磯夫 (4)      | 石田 文子 (26) | 山元 正規 (37)       |
| 三河アララギ歌集IV     | 大須賀寿恵 (5)      | 森 厚子 (26)  | 田中 清秀 (38)       |
| 歌集「續草々」        | 今泉 米子 (6)      | 山崎 俊子 (26) | 今泉 如雲 (38)       |
| 歌集「はゝきくち」II    | 河原 静誠 (7)      | 三田美奈子 (27) | 植村 公女 (38)       |
| 春の海照り          | 岡本八千代 (8)      | 水野 絹子 (27) | 『二茶名句集』          |
| 東雲             | 今泉 由利 (9)      | 牧原 規恵 (27) | かさね吟行会           |
| よみがえりくる        | 弓谷 久子 (10)     | 稲吉 友江 (27) | 『酔いの徒然』(70)      |
| 薺の径            | 内藤 志げ (11)     | 鈴木美耶子 (27) | ある自然科学者の手記(69)   |
| 蒲公英の花          | 林 伊佐子 (12)     | 現代学生百人一首   |                  |
| 雷雲             | 安藤 和代 (13)     | 東洋大学       |                  |
| 理解             | 清澤 範子 (14)     | 水田 百香 (28) | 『江上浩二の独り言』       |
| 一年の締め          | 伊藤 忠男 (15)     | 小山田理紗 (28) | 絹の話(87)          |
| 冬野菜            | 鈴木 孝雄 (16)     | 山崎 勢生 (28) | 楽しい時間(63)        |
| 水族館            | 森岡 陽子 (17)     | 山田 美来 (28) | 漢詩研修(十六)         |
| 今日も無事          | 阿部 淑子 (18)     | 坂井 直人 (29) | 『歴代天皇御製歌』(八十五)   |
| はつらつと          | 足立 晴代 (19)     | 高比良疏南 (29) |                  |
| 冠雪の富士山         | 白井 信昭 (20)     | 竹内 拓海 (29) | 土偶(3)            |
| 五井山            | 杉浦恵美子 (21)     | 赤羽 佑太 (29) | 『水魚』のことから(205)   |
| ジョウビタキ         | 山口千恵子 (22)     | 鮫島 満 (30)  | みなさまへ⑦⑧          |
| 平成二十九年の逝かんとす   | 夏目 勝弘 (23)     | 津之地直一 (31) | 編集室だより(二〇一七年十二月) |
| 歌集「夢のつづき」      | 水上 信子 (24)     | 高橋 育郎 (34) |                  |
| 贈呈誌            | 夏目 勝弘 (25)     | 浜田 紀政 (36) | 野菜の花(20)         |
| 『いとよせ』         |                | 今泉 由利 (36) | 鈴木 孝雄 (59)       |
| いーはとぶ          |                | 柳田 皓一 (36) |                  |

黄素馨の門（昭和四十一年〜昭和四十四年） 御津磯夫

成りて落ち咲きて枯れゆく庭のみち歩めるわれは慾ふかくして  
けふ摘みて明日は萌ゆるあしたばの冬の葉青くみづからが煮る  
小白崎に重なる乳ヶ岬のくれはてて富士ある方に枕をなほす

あしたばは抜きやすきかな降りたちて指さし入るる火山灰土に  
蜂ノ尻に引きしあしたばの冬の葉の青さは萎えずつまの手にあり  
若き醫となりて銀座にききたりき波浮の港をさして見下す

夕雲の旗雲ひとつ下照りに天城嶺のうへにくだることなし

ありあけの月の光とあかときの薄明のときわが起きいづる

空ひくくわたりてゆきし冬雷をひとたびききてわがねむりたり  
茜さす歌碑のところを標す石くろみかげの面を研ぎてみがきて

## 三河アララギ歌集Ⅳ

大須賀寿恵

秋雨にもものみな濡れて柏の葉の濡れ光る葉の紅葉うつくし

尺八寸の鉢に素枯れし高砂百合風ぎたる夕べ種子をこぼしぬ

碑をめぐる白砂を掃き清む箒目の立つを楽しむとして

夕べには雨にならむと佇つ庭に鶯笛鳴く二声ばかり

素枯れたる鉄線の蔓を切り捨つる蔓は生きをり花芽をつけて

水苔のままに春雨の中におかむ田峯の山のかたかこの花

曇りつつ降りつつ今日の夕べには洗濯物が乾きてをりぬ

葉の蔭にひそかに結べる木瓜の実の皺立ちながら黄ばみ始めぬ

あくがれは斯のごときか背の高き女子大生の亜子ちゃんに逢ふ

花首を傾けながら堅香子は淡紫に匂ひたつらし

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

拭かれたる長き廊下に光あり光しづかになりになるかも

御津の海の鰈の洗ひ今朝も買ふ葉室の窓より手をさしのべて

青き葉の蔓よろよと烏瓜窓に入りくる幾度にてても

あたりまへのこととし思ふ笹竹の青葉しなひてしくしくの雨

海を埋めて成りたる荒き陸くがにをり潮のひびきも伝ひ来たらず

あらたしき思ひに庭の引馬野の萩の一叢もみぢしてゆく

ささにしきこしひかり置きて音羽の長澤米たのしき幾日

何ねがふ心ならねどわが家にゆかりの古き千手観音

いまさらにみ姿美しくなり給ふ冬に入る日の千手観音

近々と寄りて目守れば御裳裾にのこる七寶の紋様の金

## 歌集「はゝきくさ」II

河原静誠

「雀おどり」の輪の中にをり足萎の弘子はをどるたのしげにして  
園児らを送りて過ぐる引馬野に石文の萩寒の芽をふく

青蓮華の花の散りしく十王堂吾をはぐくみし伯母はいまさず  
椎の実の黒きつぶら実拾ひをりわれをはぐくみし十王堂の庭

石仏あらはになりし十王堂庭の草木は誰が伐りしか

裏木戸をふさぐ筈なぎ倒し十王堂の仏前に坐る

幼児期を吾が育ち来し十王寺を師の七回忌の今日立ち去らむ

木枯のふき来る水漬田の道寒く猫待つ家に吾が帰りゆく

一日の保育を了へて帰り来し部屋にたはむる三毛と虎猫

膝の上に猫居らしめてレポートのために撰訳集を今宵もよみぬ

## 春の海照り

蒲郡 岡本八千代

何といふ貝かは知らねど貝殻の小さき一つをわが掌てのひらに

けふもまた春の海照りの空の下独りもの思ふわたくしにして

しろじろと光る春先の海照りに詩のやうなことは浮かびくるごと

老ゆらくのわれはインスタも持たずして暮れてゆくなり一日ひとひのあはれ

夫のこと殿様と思ひ己をば下女とも思ひ日の暮れてゆく

大切なるわが「道後資料」の大封筒またしまひおく本立の中に

漱石と正岡子規の百五十年すぎゆきてわれに今年の正月

鈍色の白き海照りの岸边より帰りゆくかな独りの己おのれ

移り変はり流るる年月の己をば静かにおもふ小夜は更けつつ

教え子の若き庭師の三人来て早も聞こえ来く鋏の音の



東京しの  
雲のめ

東京 今泉由利

東雲の空に向かひて元旦の光りを私の部屋に招けり

東京の水道水を若水とこの年はじむブルーマウンテン

満月と私との距離近づきぬ最も近い今を見守る

電線の二羽の雀の囀りが聞こえてゐるよ元旦の部屋

遠き世の祖父母の教えに忠実に里芋コンニャク水菜の雑煮

里芋のぬめり成分なくさぬよふ遠き記憶の甦りつつ

湯げたつる家伝の雑煮食べ終へて戻りゆきたりニューヨークへ

富士山の噴火の名残のルーム層土盛りあげて霜柱立つ

男おのこなる丈たけに小面装めのとひて女めのとと舞わだかまふを蟠わだかまりゐる

幾十億の個性のなかのひとりにて海のなまこひたすらを只管思ふ

## よみがえりくる

豊川 弓 谷 久 子

音立てて大き枯葉が道に舞ふけやき並木に人影も無し

キルテングの伴天縫ひたり母の如く我を想ひてくれる人に

ほのぼのとよみがえり来る歌会にて三河アラギ賞戴きし日よ

休まずに三河アラギ一筋なりき御津先生の門下生として

寿恵先生と静誠様が声揃えわらべ歌歌ひし日もありき

パン食の朝餉にかかせぬ苺ジャム我の自慢の味に煮込まむ

クリスマスイブとケーキ届きたり代りに苺もたせてやらむ

モンブラン子と分け合ひぬ昔より我の一番大好きな味

つきたての餅を今年も届けると笑顔で君は帰りゆきたり

五十肩の痛み互にかこち合ふ六十の子と九十の我と

## 藪の径

豊川 内藤 志げ

角を曲り丸あるい月が白く見ゆ車が進めば月の低く見ゆ

カレンダの峽の紅葉剥はがしたり終りの一枚名古屋城に雪

寒いよね冷たいよねと見ているわれ水道の水温みのあると

水道の水に温みがあると云い嫁と夫とが手早く働く

藪の径コナラの落葉の厚き中音たて踏むも楽しきものよ

久しぶり野分静まり赤石の峰に霞みて墨絵のごとし

沢庵の重石しだいに傾きて三日目にしてついに崩れる

生垣の隙間より漬物たのむと十本の細き大根さし出す姫

坂を下り竹の浮き根に蹴瓜づきぬおつたと転ばずに済む

正月の寄せ植え鉢小さくし万年青を主にし葉牡丹を寄す

## 蒲公英の花

岡崎 林伊佐子

蒲公英の花も終りてその茎を鳴らしつつ行く朝の散歩に

朝おきて飲む一杯のコーヒーに心やすらぐ己の時間

ふる里の萩の墓所に家族等と先祖の供養に山坂のぼる

電柱は杉の木の間に残りゐて帰省するとき電気はつかえぬ

ふる里を残さむと詠むわが歌も数冊となる生きたる証に

廃屋をとりまく木立にふる里は夕かげ早きひと日とおもふ

人影もなきふる里に帰省して友達しのぶよ荒ら家となりて

小銭置き花束あがなふる里の無人の店も秋寂びてをり

入社より残せる夫の辞令書に子育て思ふ懐かしく思ふ

無気力は呆ぼけの兆しと思いたり共に老いゆく夫との暮らしに

## 雪 雲

豊川 安藤 和代

北風に高圧線のうなる音父の応援と思える夕べ

リハビリの夫折る鶴は楽しけれ首をかしげて太き口ばし

日び一人ひとりの部屋でひとり詠む吾の短歌は寂しからんや

嫁がせて二十五年よ娘は娘です吾の好物忘れておらず

娘のくれしピンクのセータールンルンで院内歩めば背筋も伸びる

薬より好物よりも人びとの温き言葉に病いいやさる

鶉のしきりに啼いて朝の窓山茶花ひそと花開き初む

掃く落ち葉混りてしかと空蟬の姿くずさず吹きだまる道

オリオン座教えてくれし母想うあの日のままのまたたきを見る

冷え深む朝の空は飛ぶ鳥も啼く鳥もなく雪雲のゆく

## 理 解

春日井 清 澤 範 子

夫の理解あればこそ吾が歌の道続き来りし五十年の歲月  
耳遠くなりたる夫と憩ふ時筆談などをする時もあり

夕暮に夫は雨戸を締る時空に満月光るを告げぬ

心大きく持てと吾の最善を尽す心に夫の励まし

子猫三匹垣根の中に遊びをり倉庫の下にて生まれし子猫

休日に杖つき歩く吾を乗せ娘と共に美容院へ来ぬ

花店の周囲まわり巡れば赤々とポインセチアにシクラメンの鉢

自転車の右に廻るも上手なり歩いても良し杖を籠に持ち

婿もなし孫もなくして吾が暮し車の用事は娘にまかせし

これで良しと思ひて過る今日の日の最善尽す吾の一日

## 一年の締め

大阪 伊藤 忠男

想定を越える自然の猛威との言い訳今年幾度聞きたり

賞得ても叶うはいつかまだ見えぬ核なきこの世夢に終わるか

爽やかな春をことほぐ宵の酒つまみチーズに愛犬の顔

大根に白菜レタス小松菜も高級品と言われる年に

右足を庇いながらの峠越え慰められぬ残菊の花

残菊に慰められる峠越え痛む右足しばし忘るる

りんどうの薬師効果を知らずしてただ見とれしか山沿いの道

年の瀬にいいふるされた言葉とてやはり良い年迎えられたし

体力の日々<sup>にちじち</sup>落ちる歳ならばやり残しこそ今の生き甲斐

生きる者限りあるとて限りなし引き継ぎ<sup>とわ</sup>終えて永遠に旅立つ

## 冬野菜

沼津 鈴木孝雄

水仙の葉っぱと花芽が競り合って花芽追い越し蕾膨らむ

強風に煽られ水仙右左しなやかにかわし花茎折れず

水仙の控えめに咲く一番花早く続けと開花を待てり

爺は逝き草ぼうぼうの菜園の蜜柑孤独に実を持て余す

御用邸の表と裏で大違い暴風和らぐ厚い松林

雲漂いだるま夕陽は見えねども日毎に変わるドラマ見に来る

真っ直ぐに足を出せどもふらついて大地が回るしばしを休む

冬野菜生きる姿で勇気くれ味と滋養で元気をくれる

大雪の霜に覆われぐつたりのキャベツの葉っぱ陽に蘇る

ニンニクの種平等に植えたのに芽出しバラバラ気まぐれ順に



## 水族館

東京 森岡陽子

早速に第九を聞くは冬はじめまだまだ静か町の趣むき

大仏師水晶使ふ玉眼は高野山の像八大童子

風うなり博物館に木の葉降る運慶仏師特別展成る

朝寒に犬寢床へユーターン毛皮なるとも潜り込み行く

冬深しスーパームーンは輝きぬ冷たく静かに研ぎ澄まされて

ガサガサとゴソゴソゴロリとのら猫の枯葉の上は楽しい遊び場

水族館命つるぐる海月槽五日目なると泳ぎ逞し

冬曇り水族館は青々とペンギン叫び鰐ゆるりゆるり

北斎の画と解説の並びゐて水族館は小さな贅沢

遠き星と光まばゆい街路樹のイルミネーション青赤緑

## 今日も無事

横浜 阿部 淑子

御神前に供えし百合の大蕾音無く開き径二十五センチ  
階段をのぼる膝への重圧は体重の六倍と聞いて驚く

瞳開け検査を受けし霞む目で見上げる月は虹の如くに

久々にバスを降り立つ停留所開発進みしばし浦島

今日も無事夫も転ばず心より感謝の就寝夜半を過ぎをり

## はつらつと

東京 足立 晴代

年内も残り少く気ぜわしく老いたる事も忘れ去りたり

シクラメン毎年育て五月まで元気に咲くを楽しみながら

クリスマス若かりし頃は方々のツリーのネオン愛でたりしこと

新しき歳迎えたりはつらつと心さわやかすこやかにあれ

天高し流れる風に元氣よくタコあがりたる初春の空

## 冠雪の富士山

豊川 白井 信昭

菊の花先がけて咲く角口の一群黄の斑<sup>ふいり</sup>入明るく

ようやくに土石運び了え駐車場折しも今宵スーパームーン

いついくつ校庭まがる道<sup>みちのべ</sup>辺<sup>くれな</sup>いに紅極まるチシオ紅葉<sup>もみぢ</sup>かな

勤めなき今日を待ちかね浜名湖の遊覧と妻を誘いい出ゆく

館山寺かの旅の詩人西行も訪い来たという口元の岩

右行けば大草山の岸に見る絶壁褐色の傾きチャート

東名の浜名湖橋の長き桁赤と白との対比美しい

東<sup>ひむがし</sup>の遠き山並続く中初冬の富士山かいま見えつつ

牧之原茶畑広ぐる丘陵地支柱いくつも羽根回り回る

深蒸し茶今に伝える製法を守り続けて百有余年

## 五井山

蒲郡 杉浦恵美子

我が窓に五井山望む今朝も亦こんな暮しがすでに七年

五井山を眺むる暮しに慣れたれど猶も慕はし山の彼方を

仕合せは齒の治療終へ躊躇なく堅焼煎餅ばりばり噛む時

地蔵には子供が似合ふ小さき手を合せ含羞み親を見上ぐる

鐘鑄場地蔵の接待し居れば我が旧姓呼ぶ人があり田舎暮しは

鐘鑄場地蔵に蜜柑供へて下されし人あり師走の凍える朝に

五井山麓蜜柑実れる段々畑これぞ初冬のああ蒲郡

習ふこと果てなしされど限界も感じる我の刺繍の腕の

ジャンドウイオツテイ最後のひとつになりについにけりトリノのお菓子我がひとり旅

もの問へば親切なれど用済めば立ち去りゆけりトリノの人は

## ジヨウビタキ

豊川 山口千恵子

木々の枝に何か啄ばむ仕草してジヨウビタキ来てゐる今年も庭に  
咲きはじめ水仙持ちて墓に参るこの角曲がれば風に真向かふ

早贄のカナヘビ棘に刺りゐる庭木の小枝わが切り行けば

塀際にたまる枯葉掃き集む暖かき朝の陽心地良きかな

つきゐるは雷なるかな仰ぎたる桜の枝にしつかりと見ゆ

三合の米をとぎゐる流し台古米終はりて新米となる

家に待つ人に購ひ提げ帰る未だ温々みたらしだんご

すばすばと輪切りに包丁入れてをり畑より抜き来し真白き大根

手づくりのケーキを食べてクリスマス招きくれし孫成長したり

寒き風にダチュラの広葉萎えはじむ白き花々ともに萎えつつ

平成二十九年の逝かんとす 豊川 夏目 勝弘

台風にて倒れ地に伏し花咲かすコウテイダリヤを見下ろしてゐる

庭すみを閉めてはんなりユウゲシヨウ淡き紅色冬紅葉なし

裸木となりしネムに寒ざむと空<sup>から</sup>の蒺実の揺れざるあした

十二月の三十日の空高し飛行機雲の跡絶えることなし

今朝ならば本宮山より富士山がクツキリ見ゆると思ひに浮ぶる

墓原への道を歩む前方の己の影と現人<sup>うしみ</sup>の我と

早朝の埋葬地に霜柱を踏み碎きゆく音のみの世界

木漏日のスポットライトなすなかに千両の実の赤がかがやく

五尺余の我が背丈の倍はある己の影が冬田に伸びる

新玉の年への思ひうすれきぬ産土の社へ縄を納む

## 歌集 「夢のつづき」

水上 信子

本棚の前に幾度も立ちてみるわが生涯の友なる蔵書を

切り捨てて切り捨ててゆくこの転居すべてのことは終に向かえり

楽しきことはよきかな移り来て老いたる身にもときめくものあり

カーテンの柄はピンクのリラの花明るき居間に設えにけり

それぞれに歴史のありて今ここに住まいし人のみな穏やかなり

新しきノート買いたり引つ越しの日より改め日記したたむ

極楽の暮らしを日夜享受するも娑婆の人肌恋うる日もあり

米どころ酒どころなる越後には小さきながらよき蔵元のあり

濁り酒ずずすと喉もと通りゆき熱き濃き味胃の腑にし落つ

のどごしの滑らかならぬ濁り酒複雑微妙に胃にたどり着く



## 贈呈誌

夏目勝弘

青森アララギ第四百三号 相馬富美子

○雨降らぬ街川の中洲広がりに細き流れを鴨泳ぎゆく

秋楡十月号 伊藤妙子

○上高地の百年あとも変わるまじ迫る雪山からまつ林

鹿児島アララギ10月号 奥悠子

○三千歩歩く夕べの路の辺にほの白く浮き月見草咲けり

11月号 有島道子

○風景に馴染みて久しアワダチ草地球はひとつの郷とも思ふ

冬雷10月号 橋本佳代子

○山を来る夕べの風の心地よく草刈る背の汗しづめ過ぎゆく

11月号 沼尻操

○梅雨明けの中に眠気さし遠く山鳩の声の物憂し

12月号 吉田綾子

○吹く風に微か香の立つ秋茗荷柿の根方に群生なして

柊十月号 川波堯子

○高山の花さく平らに岩ひばり番つつまし土の色して

十一月号 矢部芳子

○朝日さす檜の梢にキビタキのしきり囀る溪に響きて

明治神宮秋の大祭奉祝 献詠作品

特選歌 森中香織

○あをあをとのびたる稲田の中に立つ農夫は胸まで隠れてをりぬ

入選歌 富田茂子

○窓よりの淡き陽射しも扱き混せて紙を漉しなり春浅き日に

佳作 福田史子

○並び座す地蔵に影をふりこぼすマタタビの木白き葉揺れは

明治神宮春の大祭奉祝 短歌大会作品

特選歌 陶山由佳

○頭よせ眠るふたりの子をしばし夫とみつめて灯りを消しぬ

入選歌 加藤慶子

○夫とわれ呼吸合はせて糊つけし棧に障子の紙おろしゆく

佳作 掛川真由美

○夫逝きて十年経ちて吾娘の言ふ「母さんを頼む」と父に言はれしと

# 『いっしょよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

降りしきる出雲大社のその後ろ八雲の山々ただぼやぼやに  
かみあり  
神在に振る舞はれたり神在餅じんざいもち「ぜんざい」となりて我らも頂く

牧原正枝

降りつづく雨に打たれて秋桜が寄り添ひあひて畠の隅に

キラキラと日差しが屋根に反射して雨上りの朝ちぎれ雲ゆく

石田文子

紫のゆかりききをり廬山寺の縁に座りて刻を忘るる

ぬれ縁に座して眺むる廬山寺の庭に枯れたる桔梗ぼつりと

森厚子

寄せ返す波音聞きつ草紅葉広ぐるなかの道歩み行く

吾子待ちて一針刺すごと花ふきんに柿色赤き花ひとつふえ

山崎俊子

ホシハジロ浮びぬし池埋められて今はでっかい湯屋の建ちたり

身じろぎもせぬ蟪蛄を枯木で追ふ大根畑の温き冬の日

三田美奈子

「助けて」としじま切り裂き喚く声寝入る我等の病室にまで  
病室の妻を労る夫達どなたも優しこれぞ今風か

水野 絹子

渋柿に干し芋大根しようがなどわがベランダは満艦飾なり  
つるし柿写真に撮りてメールする夫の育てし渋柿ですよ

牧原 規恵

畑行くは生き甲斐と言ふ母の背をそつと見送る朝焼けの中  
下山の里の道の辺に夫と来て無人販売の柿の実赤きが

稲吉 友江

傘さして出雲大社の松並木長き参道友と二人よ

君とわれ温<sup>ぬく</sup>温<sup>ぬく</sup>そばをすすりたり出雲大社の鳥居前の店

鈴木美耶子

山際に木いちこの照葉見つけたり我は野ボタンと取り合はせ生けむ  
コンクールに今年も我は参加せり美しく生ける花の競演

吉見 幸子

## 現代学生百人一首

東洋大学

テスト終え交わす挨拶恒例の「さよならシャーペン」「おかえり自由」

専修大学附属高等学校二年（東京都）

水田 百香ももか

見回して祖父、父、母と名を呼ぶが祖母はわたしを思い出せない

専修大学附属高等学校三年（東京都）

小山田 理紗

気がつけばスマホの画面開いてるおれはなにかに操作されてる

貞静学園高等学校一年（東京都）

山崎 勢生せな

被服室ファッションショーの服作りここは静かな私の世界

東京都立片倉高等学校三年

山田 美来みくる

照明が当たれば僕は僕じゃない舞台の上で「誰か」に変わる

東京都立鷺宮高等学校二年 坂井直人<sup>なおと</sup>

四年後の東京五輪日の丸でコートの中か観客席か

東京都立東大和高等学校一年 高比良琉南<sup>たかひろなる</sup>

ホテルマンになりたいけれど背が小さいでも負けないぞ心はでかい

東京都立府中工業高等学校三年 竹内拓海<sup>たくみ</sup>

両親と議論していて論破した次から誰を頼ればいいの

東京都立つばさ総合高等学校二年 赤羽佑太

## 御津磯夫短歌鑑賞 2

「月虹」 鮫島 満

引馬野には穿<sup>よ</sup>き換へたまふに備へせし草鞋<sup>わらじ</sup>忘れて三十二年  
『わが冬葵』 昭和四十八年

前号で取りあげた「わが部屋に夕餉よろこびたまひつるみ齡はけふのわれにおなじき」について、茂吉を安礼の崎に案内した二十二年前のことを思い出しているのだということ述べた。それからさらに十年後に磯夫はまたあの日のことを思い出して掲出の歌を詠んでいる。

三十二年前のあの日は雨が降っていて、滑り止めのために草鞋を履いて歩く茂吉を作者は案内しあつた。前号で、茂吉が草鞋を履いていたことを詠んだ一首に触れたが、予備の草鞋を用意したことは知らなかった。作者はあの三十二年前のことをずっと気にしていて掲出の歌を詠んだのだろう。

つまり、この一首の「草鞋忘れて」の主語は作者なの

である。前の晩から用意していたのに持つて行くことを忘れたのである。ということは、霜も下りようかという十一月二十一日の雨の中を歩いたわけだから茂吉の草鞋が傷んだことは想像に難くない。なにしろ作者が予備を必要とすると考えていたほどの悪天候だったのだから。

そのことを茂吉は日記に記すことをはばかっているが、作者はやはり忘れることができないのである。だから、作者には、あの日のことと思われる

靴下を火鉢にあぶりぬたまひきいまは防波堤の下の  
この部屋（昭和三五年）

靴下を火鉢にあぶりし手をおもふいまにしたしきわ  
れの茂吉忌（昭和五十五年）

という歌があるのである。

磯夫を語るには引馬野や安礼の崎に関する歌を外すことはできないが、すでに本誌（二〇一一―一二二）で詳述したので、次号からは他のテーマで詠まれた歌を取り上げることにした。

## 萬葉秀歌の鑑賞

## 津之地直一

葦辺ゆく鴨の羽がひに霜ふりて寒き夕は大和し思ほゆ

葦辺行 鴨之羽我比爾 霜零而 寒暮夕 倭之所念(①六四、志貴皇子)

(口訳) 葦辺をゆく鴨の羽がいに霜がふつて寒い夕ぐれはふるさとの大和がなつかしく思われることだ。

慶雲三年、文武天皇が難波宮に行幸された時、同行の志貴皇子の詠まれた歌である。「葦辺ゆく」は葦の生えている水辺を浮び行く趣である。(葦が散る) 難波(②四三三二)と言われる様に、当時、難波は葦が生い茂つていたのである。「羽がひ」は「羽交」の意で結局「羽根」「翼」と同じである。第三句までは矚目の景ではなく、「霜のふるような寒さの身にしみる夕暮れ」を具象的に表現したものとするべきであろう。酷暑のさまを「地さへ裂けて照る日」(⑩一九九五)と言つたのと同じ云い方と見られる。結句の大和は、都のある大和(今の奈良県)のこと、(⑦一二一九)は強めの助詞。初冬の候の旅先の寒い宿にあつて、あたたかい心温まる思いのする我が家(を)を思い、その大和をなつかしく思い偲んで居られるのである。類歌に「和歌の浦に白波立ちて沖つ風寒き夕は大和し思ほゆ」(⑦一二一九)があるが、皇子の作の追隨歌と思われる。

大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象きさの中山呼びぞ越ゆなる

倭爾者 鳴而歟来良武 呼兒鳥 象乃中山 呼曾越奈流(①七〇、高市黑人)

(口訳) 大和の方には鳴いて行つてゐることであろうか。ここ吉野では今、呼子鳥が象の中山を鳴きながら越えてゐることである。

持統天皇が吉野宮に行幸せられた時(その年次は不詳) 扈從の黒人の作。「來らむ」は今日の語感では「行くらむ」とある方が分りがよいが、これは吉野の地に居ながら、自分を大和の地に置いて、そこを主とした言い方になつてゐるのである。古注に「こなたに心をおきてはゆくといいひ、かなたに心をおけばくると云、これ古人ゆきくを用ふる法なり」ともある。「呼子鳥」は古來諸説のある鳥であるが、通説はカツコウ(郭公・閑古鳥)である。その鳴き声がいかに人も人を呼んでゐるように聞えるところからの名であろう。「象の中山」は吉野町宮滝の正面にあたる山を言い。ここには喜佐谷もある、集中には象山きさ(⑥九二四) 象の小川(③三一六) も見える。「象」は和名抄に「獸名、似水牛」 大耳、長鼻、眼細、牙長者也。岐佐」とある。「呼びぞ越ゆなる」には係結びがあり「越ゆ」は終止形で「なる」は音声伝聞の助動詞「なり」の連体形である。一首、都にあつてこの鳥の声を聞く人と思ひやりながらも、矚目の景を具象的現実に述べ、その端正な声調と相俟つて黒人の佳作となつてゐる。



み吉野野山のあらしの寒けくにはたや今宵も我がひとり寝む

見吉野乃 山下風之 寒久爾 為当也今夜毛 我独宿牟(①七四)

(口訳) み吉野の山の、山から吹き下すあらい風の寒いことであるのに、ああどうやら今夜も私は一人寝する事で  
あろうか。

文武天皇の吉野行幸の時、従駕の人の作で作者名は不詳である。左注には「或いはいふ、天皇御製歌」とある。「寒けく」の「寒け」はこの場合は形容詞「寒し」の古い未然形で、それに体言化の接尾語「く」のついた所謂「く語法」の語形で、形容詞の連用形に出てくる「ーけく」、例えば「明らけく」「はるけく」「さやけく」等とは語性を異にする語である。特殊仮名遣の方からも「く語法」の「け」は甲類、形容詞語尾「けく」の「け」は乙類仮名である。「寒けく」の同類語には「安けく」「憂けく」「つらけく」「きよけく」等がある。「はたや」の「はた」に当る原文の「為当」は集中にはこの一例であるが、漢籍には用例多く、既に先学により敦煌出土の神会禪師語録中の例も示されて居り、支那の六朝頃からの俗語で、主として会話等に用いられていた話し言葉で、「や」は詠歎の係助詞で、結句は「む」と連体形止となつて居る。遠く離れた故郷や妻を思う心もこもつて居り、素直に純心に詠み下して居て、読む者の心を打つ作である。

童謡 「房州 花摘み唄」

高橋育郎 作詞

房州よいとこ チョイと常春の

光のどかに うらうらと

お花畑は 花ざかり

色もとりどり 咲き乱れ

心はずむよ 唄も出る

摘もうよ 摘みましょ 花籠に

房州よいとこ チョイと南風

花のたよりに さそわれて

若い二人の ランデブー

つくつてあげましょう 髪飾り

微笑交わし 春を呼ぶ

摘もうよ 摘みましよ 幸せに

房州よいとこ チョイと花どころ

フラワーラインに 青い海

温泉あびて ゆったりと

心もからだも リフレッシュ

二人のデュエット 夢を呼ぶ

摘もうよ 摘みましよ 花の束

『俳句』

箱根路や湯けむり染むる冬茜

浜田紀政

廃校に歌声聞こゆ冬紅葉

鍋鶴に餌やる声の飮して

鬼柚子の香りのなかに眠りゆく

今泉由利

無患子目柑橘科柚子は鬼となる

重ね着をすることはなしヒートテック

夕暮れや船団のごと鴨の陣

柳田皓一

天辺の孤高楽しか冬の鳥

山茶花やゴルフプレーの右左

寒禽の一声ありて影のなし

山 迫 京 子

切り込みて丸ごと入るる柚子湯かな

ふる里のデコポン届く年の暮

かいつぶり水脈を残し姿なし

森 岡 陽 子

追風に枯葉転がる飛鳥山

室咲や窓際に置く万華鏡

うどん屋の軋む木椅子や隙間風

山 元 正 規

住みなれし借家暮しや花八つ手

寒禽の声抜けてゆく疎林かな

坪庭の花芽ついはむ冬の鳥

田 中 清 秀

蒼空や葉のなき枝の寒雀

冬日射し玻璃戸に映る緋毛氈

立冬の裾しか見えぬお岩<sup>やま</sup>木山かな

今 泉 如 雲

雪の夜のパンタグラフの火花かな

街灯に粉雪の影あまたなる

会釈して擦れ違いをり冬紅葉

植 村 公 女

まん丸の波郷の眼鏡冬灯

野球部の皆丸坊主冬暖

「一茶名句集」(大正十一年一月廿五日発行)

神の灯や餅を定木に餅をきる

庵の煤風が拂つて呉れにけり

わんといへさあいへ犬も年忘れ

お仲間に猫も座るや年忘れ

## かさね吟行会

### 「すみだ水族館」 十二月

田中 清秀

クラゲは毎月あるいは水母と書き俳句では夏の季語となっている。数億年前から形が変わっていないと言われる乳白色で透明な寒天質の生物で触手を伸ばし傘を開閉して水中を浮遊する。師走十二月に訪れたすみだ水族館にはこのクラゲの誕生から生体まで月ごとの成長過程が展示されており、科学的でかつ幻想的な姿を見ることができ。平成二十九年十二月八日、今回は趣向を変えて東京スカイツリータウンにあるすみだ水族館を吟行した。

襟巻やスカイツリーは雲の中

周二

短日や子供のおわぐ水族館

陽子

聖樹の灯水面に映し水族館

さち子

スカイツリーは日本古来のそり形や五重塔の心柱制振などの技を最新の建築技術と融合した世界一高い電波塔である。その高さは六百三十四メートル、流石に下から見上げるとその雄大さに圧倒される。展望台からは眼下

に江戸川や隅田川周辺の下町、新宿高層ビルさらに東京タワー、東京湾がジオラマのように見下ろせる。また、天気が良ければ美しい富士の姿を遠くに望むこともできる。そして、ソラマチ商店街などの商業店舗や観光施設が併設されており、スカイツリーを含めて街全体を東京スカイツリータウンと呼ぶ。

すみだ水族館には幾つもの水槽がまるで美術館のように並ぶアクアギャラリー、全方向から美しい珊瑚礁を鑑賞できる四連の水槽、小笠原諸島をはじめとする東京諸島の海をテーマとした大水槽などがあり、展示に工夫を凝らしたゾーンが特徴である。子供だけでなく若者も楽しめる興味深いレジャー施設となっている。

水槽越しに鮫の目と合ふ冬帽子

正規

大水槽雅なエイの年の暮

清秀

冬の日に生まれし海月の命かな

由利

クラゲの話に戻るとすみだ水族館のホームページにクラゲ展示の楽しみ方が載っていた。まず色を楽しむ、様々な色を持つカラージュエリーフィッシュ、薄いピンク色のカサクラゲ、鮮やかな赤い触手のアカクラゲなどは美しい色味を鑑賞できる。次に形を楽しむ、ほとんどが円



形と思われているがタコのような形のタコクラゲ、まったく突起のないウリクラゲもあるとか。花のように見えるサカサクラゲは何匹かいると水槽中がお花畑ようで可愛らしい。クラゲの生態は奥が深くまだ知らない神秘の世界がいっぱいあるようだ。

子供に大人気のペンギンは愛くるしい仕草と表情で大人も釘付けにする。ペンギンは飛べない鳥で世界に十八種の仲間いるそうだ。また、真直ぐ立って歩くことから人間を友達と勘違いしているのかとても人懐こい、和名を「人鳥」と呼ぶのも頷ける。

また、生態が変わっている動物としてはチンアナゴがいる。小さな穴に住みつき頭を出したり入れたりしながら潮の流れに乗ってくるプランクトンを捕食して生活している。臆病そうな小さな眸は見ている人の心を和ませる。

着膨れてぺんぎんを見る水族館  
短日をちんあなごと見つめ合ひ

京子  
由利

更に進むと散歩中のオットセイに巡り会った。飼育員の女性の誘導で水槽を出て子ども達の集う広場に遊びに来ていた。似たような形の動物にオットセイとアシカ、

あるいはアザラシがいる。どこが違うのか、飼育員に聞いたところオットセイはアシカ科の動物でアザラシはアザラシ科、実はみんな同じグループで違いと言えば耳が外に飛び出しているのがアシカ科で穴が開いているだけなのがアザラシ科、また、すらっとシャープな体型がアシカの仲間だとか。なぜか水族館に来ると子供に戻り科学的な向学心が湧いてくるのは皆さん同じだろうか。休憩広場で俳句の構想を考えながら作句に入る。句会には近くのカラオケハウスで行われ、いつもの様に囁み三句出し四句選でおこなわれ上達した腕前を披露する。和気あいあいの内に水族館の吟行会はお開きとなった。

■かさね吟行会■

日時 二月九日（金）

場所 石神井公園

集合 西武池袋線・副都心線

中央口改札 11時集合

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

## 『酔いの徒然』（七〇）

丸山 酔宵子

### 『呼子イカと名護屋城跡』

11月初旬、玄界灘の城下町が熱狂と興奮に酔いしれた「唐津くんち」も終わり、晩秋の唐津の朝は柔らかな日差しに包まれている。昨夜は紺屋町小料理屋「山茂」で透き通る呼子イカの活き造りの大きな目玉に睨みつけられながら、地酒鳴滝酒造「聚楽太閤」を痛快に飲み、やや二日酔い気味。唐津バスターミナルから呼子行のバスに乗って、秀吉の大陸への前線基地となった名護屋城跡へ。

秀吉は九州を平定、奥州伊達政宗を服属、北条氏直を打倒、徳川家康を関東に移封。天正18年（1592年）太閤秀吉は天下統一を成し遂げ、いよいよ大陸への野望を一挙に進めたのである。

名護屋城は呼子から海岸線沿いに細長く広がる波戸岬

の丘陵を中心に築かれた陣城で、五重天守や御殿が建てられ、それを囲むように全国の武将たち120ヶ所もの陣屋が築かれた。そしてその城の周囲には城下町が広がり、最盛期には人口10万人を超えるほどにも繁栄した。

朝鮮出兵（文禄・慶長の役）は、文禄元年（1592年）総勢15万8千の兵が9軍に編成され、小西行長・宗義智率いる第一陣が名護屋城を出発し壹岐・対馬を経て、最終的には、20万以上の兵が朝鮮に渡って行った。しかし、慶長3年（1598年）秀吉の死をもって終結、撤退したのである。

秀吉は京都聚楽第から当地を本営とし、大政所の危篤時を除いて滞在すること延べ1年2か月。秀吉は徳川家康、加藤清正、前田利家など名だたる天下の武将たちに指示を出していた。その一方茶室で茶会を楽しんだり、瓜畑で仮装大会を催したりして、京の都文化をも楽しんでいたのである。

何故、秀吉は朝鮮出兵を決断実行したかの理由はいろいろな説がある。信長の夢を付度実現？ その夢は領土

拡大か？ 元寇の役の復讐か？ スペインへの対抗か？  
等々、様々な諸説が現存するが、実際に数十万人の秀吉  
傘下の戦闘員が、現在の北朝鮮を越えて明まで攻め入っ  
たという事実には驚く。しかし、そこには当然民衆を巻  
き込んだ異常な状況が繰り広げられたことは想像に難く  
ない。

現在の名護城跡には「名護屋城博物館」が建てられ、  
遺品、書簡、ジオラマによる陣屋と布陣そしてバーチャ  
ルリアリティ名護屋城など興味が尽きない。特に、秀吉  
がおね（北政所）宛てに出した自筆の手紙で、厳しい戦  
況のこと、風邪をひいたこと、おねへの気使いなど、戦  
時下にもかかわらず、十数通も出している秀吉の情のあ  
るまめさに驚かされる。

## 睨むなり呼子のイカや霧の朝

### 酔宵子

## ある自然科学者の手記（69） 大橋 望彦

### 『春分の日』

小学校時代からもう70年来の付き合いだが、今は上智大学の名誉教授となった広川秀夫君が、都心からホリ

デー号で2時間掛けてやって来てくれた。態々奥多摩の

田舎まで、フランケンワイン、シンケン、ハムサンド、

それに生のホワイトアスパラガスを大事に抱えて持つて

きてくれた。最近やたらと「食育」といってそれ程上手

くもない料理を得々として薦めたり、「B級グルメ」が

持て囃されたりして、なぜ「A級グルメ」じゃあないのであ

らうか。その様な時に、やはり本物の味と、心持が

「旨い」ものだということを改めて、感じさせてもらった。

「ホワイトアスパラガスが手に入ったから、一緒に調

理して食おう」と、云う気持ちが嬉しい。

「俺がレモンを用意するから、バターとオリブオイルあるか？ それだけ用意して待っていて呉れ。」

「丁度会うワインとシンケンがあるから、それも持つて行くよ」。永くドイツに留学していた彼らしい。豪華なランチとなりそうな気がしたが、事実、仲々なものであつた。

当家としては、それに見合う洒落たものではなく、一寸したサラダと、何時もの様に土産物として持つて帰ってもらえば良いと想い「悦鹿寿司<sup>えつろくずし</sup>」なる物を作つて待つていた。

料理が出来た頃、誘っていた工房「亥」の白井建治氏<sup>ひらき</sup>が、「庭を覗いたら、幾つか出ていたから」と云いながら露の臺<sup>と</sup>を持参してくれた。三人が、昼間からのワイン（日本酒も含め）で、寛いだ話で楽しんだ。

長閑な春分の日であつた。

## 「江上浩二の独り言」

江 上 浩 二

### 無の数学的考察、スカラー、ベクトル（I）

ある和尚が願わず無心に祈ることが道だというような話から火がつけた件は、お賽銭を恵むから、その反対給付として願いを適えてくれという、賽銭の10000円札に値する願いの価値（V）とで数学的バランス  $10000 \parallel V$  をとってはいけないという和尚の教えである。

お賽銭≠無心の願え、とても数式が書ける。これはあくまで、スカラーの加減の世界である。

数学的“無”も表現、理解は難しい。まして心の“無”とは何ぞやとなったわけである。

数学の世界ではベクトルの合成があり、ベクトルaと方向が反対のベクトル-aの和合成は“zero”となる。心の無を考えると何も願わない空虚な無なのか、漢字語句では目の前のあるものが無い、亡くなるという認知方法で初めて無を理解するが、私はベクトル合成、存在する事象の合成で“無”を考えてみたい。

こういう例のお話をする。よく運動会の競技で行われる綱引きである。

東に屈強な人が20名、西にも屈強な若人が20名、ピストルの合図とともに、一斉に綱を引く。

中央の赤い目印は一向に動ぜず、静止状態。これを無心にいる人の心と観ても良からう。

時間がたって、やや赤い印が若人側に寄ったとする。これ

はもはや無心ではなく、若人側でないグループに、何か浅ましい願いなど心に思い浮かべた輩が一人二人いて、引く力が例えば1+2 kg減ったのかも知れない。若人側は引く力を大きくせずとも、バランスが西側へ崩れて、勝利となった。言葉では、棚からぼた餅、他人の禪で利を得るではないであろうか。

数式では、 $Force_{20} = Force_{20}$ （大人20人分なので、例えば一人40 kgとすると  $x \quad 20 \times 800 \text{ kg}$  の力）で均衡していた。それが  $Force_{20} \neq Force_{20}$  に変化してしまったのである。（綱を引いている模式図）



以前見かけたが、綱引きの綱が東西、左右で引き合っている最中に切れてしまった。

何が起きたかという点、凄いで引き合っていたのだから、大勢の人がすつ飛んだのだ。

赤い中央の印は不動だが、綱が切れた瞬間、双方で引いていた自らの力で自らの体が動いた事になる。

こう考えると綱引きに3つの不動点（赤い印）があることが分かる。この動かざる3つの赤い印の状況を果たして区別して観る事が出来るのだろうか？

一つは人もいない長い綱が地面に置かれている。

二つ目は左右に引く人がいて綱に手をかけているが、未だ引く力を入れていない準備状態。

三つ目は、まさに左右に引く人がいて力を入れて引っ張っている対戦均衡状態。

無の数学的考察、非可換演算についても議論してみたいが、文字数も多くなりそうで、次号（II）でお話しさせて下さい。

## 絹の話 (87)

「アトリエトレビ」 今 泉 雅 勝

### 「遣唐使の給料」

#### 飛鳥、奈良時代の国際情勢と庶民の暮らし

遣唐使とは飛鳥時代（舒明天皇）西暦630年から平安時代（宇多天皇）の894年、菅原道真の提言により廃止されるまで260年余の間に十数回に渡り、朝廷が当時の東ローマ帝国と並び世界文化の中心であった唐に国際情勢を知り、大陸文化を輸入する為、数隻の船団を組んで、一回で学業門閥優秀な者から選ばれた五、六百人を派遣し、二、三年かかりで往復した使節団を言います。

当時の唐はシルクロードによる東西の交流が盛になり、絹をローマに送ると100倍にもなると云われた交易でバブルに沸き立っていたと思われます。

それに伴い西方の各地から新たな知識、技術を持った人々が集まるインターナショナル国際都市でした。

三蔵法師も正式な仏教教義を得るべく、シルクロードを往復した一人で、空海や最澄はその教義を遣唐学僧留学生として日本にもたらした人達でした。

一方庶民の暮らしは素焼きの土師器、須恵器が一般化した時代で、衣服は草木を原料にして作った麻を着ていました。絹の生産もありましたが、大化の改新で租庸調の税制が定められると、絹も調として税制の大きな一翼を担い、各地に産地形成（三河の国は良質な絹の三大産地）がなされてゆきました。良い繭の生糸や玉繭の紬、真綿は税として納められ、残された汚れ繭、穴あき繭、毛羽、きびそなどは庶民が紬や真綿を作り、冬などは麻には比べようもない軽くて暖かな幸せをもたらしにくる宝物の様な存在でした。

### 延喜式

平安時代初期の禁中の年中儀式や制度等を記し、967年に施行されたもの。

当時の遣唐使は荒海を渡る命がけの仕事で、往も復も難破する危険にさらされていました。

出発前に団員にそれぞれ出張旅費が支給されたようで、「延喜式」にその基準額が示されています。

大使は「あしぎぬ」（紬）六十匹、繻（めん）玉繭などから作る上質真綿）百五十屯、布（麻）百五十匹、副使、留学生、学僧は大使の三分の二と定められています。国の将来を期待された留学生や学僧がいかに厚遇さ

れていたか解ります。

判官、録事以下使用人までそれぞれ、あしぎぬ、真綿、布が絹を中心として支給されていた事が記されています。

最も少ない水夫は夏服、冬服支給があったものの、真綿四屯、布二匹のみで、何年に及ぶか解らない給料としてははなはだ心もとないものがあつたでしょう。

### 給料を現代換算すると

当時の度量衡は唐に習ったもので、一匹は二反、一反は成人の着物1着分、時代により長さの差異ありますが約12m強、一屯は二丁、一丁は三両と換算し、一両は37・3gなので、大使の給料は絹の紬の布は六十匹、即ち120反で約14440m、真綿は百五十屯なので約3357kg、麻布は300反、約3600mになります。

一番下の水夫は真綿900gと麻布48mです。

### 繇(めん)良質真綿)、絮(じよ)屑繇真綿)

日本では戦国時代から江戸時代にかけて木綿の綿が普及して来ると、それらを区別する為に絹綿を真綿と記すようになりましたが、これは日本製漢語です。

真綿は広く庶民にも使われましたので、中国には真綿を指す文字は質、使途に応じて10字以上あります。

玉繇(二頭の蚕が一つの繇を作ったもの)は糸が絡んで一本の糸が揚げられないので、湯の中で広げて真綿として利用して、それを古くは「繇(めん)」と言っていました。あしぎぬはそれを紬いで作ったもので、今日の紬です。

遣唐使の給料は糸(繇5個から揚げる超極細糸)、や絲(繇10個の一般の細糸)から織られる絹布ではなく、紬や真綿を支給したのはなぜでしょうか？

おそらく糸や絲で織った上等な絹織物は貴族の衣装や、恩賞などに使われ何百人もの給与に充てるほどの生産がなかったと思われます。

また庶民には絹の着用を禁じていましたので、渡航支度の物々交換にはあしぎぬや真綿は都合が良かったのではないかと推測されます。

### 疑問に思う事

遣唐使の給料が、遣唐使派遣の盛んな時代に制定された大宝律令やその17年後の養老律令に記されず遣唐使廃止後70余も過ぎてから延喜式に記載されているのはなぜでしょうか？



## 楽しい時間 63

山本紀久雄

2017年12月30日

## 明治維新150年

2018年は、明治維新150年の記念すべき年である。各方面で記念行事が多彩に挙行されるであろう。

筆者が主催する山岡鉄舟研究会も、2018年は鉄舟の実像を正しく妥当に、世に認識される転換年にしたいと願い、その結果、当会に関係する二人の識者が「鉄舟の業績を正しく認識させる書籍」を出版する予定で、大いに期待している。

ここまで至った背景には、2017年に発生した以下の動きがある。

- 1 2017年2月、筆者が「刀剣博物館」で『正宗鍛刀記』原本発見。
  - 2 2017年4月、当会の水野靖夫氏が『英国公文書などで読み解く江戸無血開城の新事実』を冊子出版。
  - 3 2017年9月、静岡市伝馬町の「西郷・山岡会見之史跡」説明文の訂正。
  - 4 2017年12月、「鉄舟が「番槍」史料確認。
  - 5 2017年12月、筆者に読売新聞から江戸無血開城についての取材。
- これらの動きについて、以下に補足説明したい。
- 1 筆者が「刀剣博物館」で『正宗鍛刀記』原本発見。  
鉄舟が江戸無血開城の功績として、徳川宗家16代の徳川家達から賜った太刀「武蔵正宗」が、「刀剣博物館」

における「開館50年にわたる寄贈名品展」(平成29年1月5日~3月31日)にて展示された。

そこで2月18日に訪問、併せて同館で学芸部調査課の石井彰課長から補足解説受けたところ、長らく行方不明で、今まで山岡鉄舟研究者が探し求めていた『正宗鍛刀記』原本が、この刀剣博物館に存在することを発見し、その実物原本を筆者が手に取り確認した。この原本が書された背景に、次の経緯が存在する。

明治14年(1881)、明治政府は維新の功績調査を行い、関係者を召還または口述や筆記を徴したが、勝海舟が提出した書類には「勝が西郷との談判を行ったと書いてあり、鉄舟の名が書かれていない」ので、賞勲局員がおかしいと思いついた。賞勲局総裁の三条実美公に報告したところ、三条は岩倉具視公に連絡、岩倉公も「それは変だ」と鉄舟を呼び出し尋ねた。鉄舟は「実は、勝からあのような書類が出ていたので、勝の面目のため自分は手を退いた」と答えた。岩倉公は鉄舟の人格の高潔さに感服しつつも、正しい史実を遺すべく、鉄舟から当時の談判事実を詳しく聞き取って、漢学者の川田剛が漢文にし、明治の三筆の一人である巖谷修が六朝楷書でしたため巻物とした。

鉄舟の人格を浮き彫りさせる物語であつて、鉄舟業績を証明する第二級史料である。

そこで、筆者がこの発見経緯を「刀剣博物館」が発行する『刀剣美術』(2017年11月号)に掲載し、山岡鉄舟研究会のホームページでも公開し世に問うた。

『英国公文書などで読み解く江戸無血開城の新事実』を水野靖夫氏が出版。



3

「鉄舟が、勝海舟の命で駿府まで行き、西郷隆盛と会って降伏条件を書いた書付をもらって帰り、西郷・勝会談（「江戸会談」）のお膳立てをした」とよく言われる。だが、鉄舟は勝海舟の部下でもなければ、メッセンジャーでもない。鉄舟は勝の命令で駿府まで西郷隆盛と談判しに行ったのではなく、事実は、徳川慶喜の警護をしていた義兄の高橋泥舟に推挙され、慶喜から直に命を受け、西郷との駿府会見へと向かったのである。

水野氏は、これ等の経緯を多くの史料を克明に調べ、横浜開港記念館に保管されている「英国公文書」の原文も翻訳、当時はすべて手書きであるから、癖のある書体の訳文は難しいが、それらを行い、他の史料も駆使し、鉄舟が慶応4年3月9日に駿府で西郷と会見し、実質の江戸無血開城をきめたことを証明する冊子を出版した。静岡市伝馬町の「西郷・山岡会見之史跡」の説明文訂正。「静岡市文化財指定」である「西郷・山岡会見之史跡」について、静岡市教育委員会によって平成16年9月に石碑説明文が掲示されたが、そこには《勝海舟の命を受けた幕臣山岡鉄太郎》とあった。この説明文言は正しくない。事実は「海舟からでなく、徳川慶喜から直接に命を受けた」である。

そこで、文言修正を平成25年3月5日に開催された望嶽亭・藤屋における「市長とのお茶カフェトーク」で、静岡・山岡鉄舟会の故松本検顧問（前会長）が申し入れを行い、以後、機会を見つけては教育委員会に同会が書き直しを要望してきた。

その結果、平成26年6月に《徳川慶喜の命を受けた旧

4

幕臣山岡鉄舟の会見」と正しく直され、併せて《三月十四日、江戸・芝田町の薩摩藩邸で山岡鉄舟も同席した西郷隆盛と勝海舟との会談により最終的に決定》と加筆訂正された。

「鉄舟が「番槍」史料の確認。

「鉄舟が駿府での西郷会談で「番槍」をあげたとして慶喜から来国俊の短刀を拝領した」史料は、日野市立新選組のふるさと歴史館叢書第14輯「特別展 幕臣尊攘派―浪士組から江戸開城へ 山岡鉄舟らの軌跡―」（2016年1月15日発行）の30頁に、「山岡鉄舟書状（断簡）」として、次のように明記されていることを確認。

「十日出立前夜、御前へ被召、御手つから来国俊之御短刀拝領被仰付、是迄度々骨折候、官軍の方へ第二番二至り候事、番鎗だと上意有之、あり難き事、御座候（後略）」（11日出立の前夜、上様は御手づから来国俊の御短刀の拝領を仰せ付けられました。是迄度々骨折つてくれたこと、官軍の方へ第一番に至ったことは、まさに鉄舟が「番鎗」との上意があり、あり難きことでありました）

5

読売新聞から江戸無血開城についての取材。  
2018年1月に読売新聞西部本社が「維新150年」企画として江戸無血開城を取り上げるため、筆者に2017年12月28日取材があった。

この取材で、筆者は上記1から4までの内容を説明し、それを証明する諸史料を提供した。2018年の読売新聞の掲載が待ち遠しいところである。

以上から、明治維新150年となる2018年を明るく希望をもち楽しく迎えることができる。

漢詩研修 (十六)

千代田岳精会 平井茂行

菊<sup>きく</sup>花<sup>か</sup>

白<sup>はく</sup>

居<sup>きよ</sup>易<sup>い</sup>

一<sup>いち</sup>夜<sup>や</sup>新<sup>しん</sup>霜<sup>そう</sup>瓦<sup>かわ</sup>著<sup>つ</sup>輕<sup>かう</sup>

芭<sup>ば</sup>蕉<sup>しやう</sup>新<sup>あら</sup>折<sup>お</sup>敗<sup>はい</sup>荷<sup>か</sup>傾<sup>かたむ</sup>

寒<sup>かん</sup>耐<sup>た</sup>唯<sup>ただ</sup>東<sup>とう</sup>籬<sup>り</sup>菊<sup>きく</sup>有<sup>あ</sup>

金<sup>きん</sup>粟<sup>ぞく</sup>花<sup>はな</sup>開<sup>ひら</sup>曉<sup>あかつき</sup>更<sup>さら</sup>清<sup>きよ</sup>

一夜新霜著瓦輕

芭蕉新折敗荷傾

耐寒唯有東籬菊

金粟花開曉更清

【作者】

白居易（七七二～八四六）中唐の詩人。字は樂天。下邳（陝西省渭南）の人。二十九歳の時、進士に及第、三十二歳で校書郎に補せられた。三十五歳で翰林学士となり、さらに左拾遺に転じた。四十四歳の時、上書をとがめられ江州（江西省九江県）の司馬に左遷された。四十九歳で都へ召喚されたが、二年後には自ら外任を求めて、杭州（浙江省杭県）の刺史に任ぜられた。そこでは西湖の堤を増築して眺望をよくする一方、州民の飲料水や灌漑用水の確保に努力した。晩年は仏教への帰依を深めて郊外の香山寺の僧らと親交を結び香山居士と称した。白居易の生前にその詩文はわが国にも伝わり、平安以後の文学（菅原道真、紫式部、藤原公任など）に大きな影響を与えた。詩文集は「白氏文集」七十一巻があり、収載詩約二千八百。現存する唐の詩文集の中で最多である。

【語訳】

○新霜：初霜。○著瓦輕：うつつすらと瓦についている。○敗荷：荷は蓮。枯れてやぶれた蓮の葉。○東籬菊：籬は垣根。陶淵明の「菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る」（飲酒）に基づく。○金粟：菊。

【通釈】

夜があけると、初霜がうつつすらと降りて瓦が白くなっている。この寒気に耐えず、芭蕉は新たに折れて、やぶれた蓮の葉も傾いてしまった。そうした中で寒気に耐えているものは、ただ東の垣根の菊だけあって、その菊の花は美しく咲いて、この暁の風景をいつそう清らかにしている。

## 「歴代天皇御製歌」(八十五)

貫名海屋資料館

「明治天皇」④

○ 暁　ねざめせしこの暁のこころもてしづかにものを思ひ定めむ

○ 旅　あとさきに人をともなふ旅ながらくれゆく道はさびしかりけり

○ 歌　世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり

○　　天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

○　　ときにつけ折にふれつつ思ふことのぶればやがて歌とこそなれ

○寶 つたへきて國のたからとなり<sup>ひじり</sup>にけり聖のみよのみことのりぶみ

○ 白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道

○ 医 ちはやふる神の御代よりひとすぢの道をふむこそうれしかりけれ  
○ かの實のひとつに心に萬民<sup>よろづたみ</sup>まもるがうれし蘆原<sup>あしはら</sup>のくに

○ 誠 言の葉にあまる誠はおのづから人のおもわにあらはれにけり

○ いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ  
○ 思ふことつらぬきはてて國民の心やすめむときぞまたるる

○ 世とともに語りつたへよ國のため命すてし人のいさをを

## 土偶(3)

### 夏目勝弘

日々のテレビで、料理番組の放送のない日が無い。朝から夜まで、どこかのチャンネルで放送されている。

食べることは生きることである。ラーメンを始め、手を変え品を変えまた時どき、大食い等、生きるための食事ではない番組もある。生きるための食事ではなく、欲望のままにまた時間のために手抜きする食事等々。(お袋の味) という言葉が死語になつてしまつた気がする。

食事の時間帯にコンビニに行くと、多くの人達がオニギリや弁当等を買つて行く。

スーパー等では夕方は主婦の多くが、惣菜や冷凍食品等の袋物を買っている。

即ち(お袋の味から)(お)が無くなり(袋の味)になつてしまった。

料理番組等でコメンテーターが言う言葉の多くは(甘い)そして(おいしい)である。

この甘い糖分が、太る。唯一の原因と力説するのが糖尿病専門医の牧田善一博士である。

氏の著書(医者が教える、食事術)より(P70)

現代を生きる私たちは、縄文人が生き抜くために備えていたDNAをそのまま受け継いでいます。消化・吸収のシステムも、それをコントロールする脳のシステムもなら変わつていません。本来であれば、縄文時代にはなかった食べ物に口にするべきではないのです。

縄文時代にも、自然に生育している、そばなどの穀類も食べていたようです。だから、米や麦などの穀類自体は、私たちの消化、

吸収システムにマッチしています。

ただし精製したものではありませんでしたし、穀類を大量に食べるという習慣もなかったはず。

私たちにとって本当にヘルシーな和食とは、縄文人が食べていたようなものなのです。と、幸いにも年金生活の自分には、縄文人の人達が食べていたような食事しか出来ないため、健康で生きていられることに感謝しなければならぬ。

縄文食料事情を豊田亜紀子著(知られざる縄文ライフ・誠文堂新光社)より

彼らは肉食系というよりも雑食系といった方が良い。もちろん肉も食べていますが、毎日食べていたわけではない。

一年を通してその時に採れるものを収穫、狩猟して餓えないよう最大限の努力をしていたと考えられます。春は、ゼンマイ・ワラビ・フキノトウの山菜等々、それらを干して乾物にしていたかも。夏は、漁労による川なら川魚また海の魚類等。それらも、干物あるいは燻製にしていたかもしれない。秋は、山芋、ドングリ、トチ、クリ、クルミなど木の実の採集、川ではサケ、マス等、冬は、イノシシ、シカ、鳥、タヌキ、ウサギなどの狩猟が多くなる。これらも燻製にして保存食としていたと思われる。

そのためには食料調達が一番の仕事。縄文時代の男性の仕事は主に狩りをして食料を安定的に家族に供給することでした。

一説によると一週間に三日ほどしか狩りにいかなかったとも言われています。

イノシシの狩りは命がけで、数人の仲間と相棒の犬とで、八十キロから二百キロのイノシシとの命がけの仕事になつてしまう。

三日狩りをし、後は狩猟道具の修理等に費していたと思われる。以下次号へ

## 「氷魚」のことから (205) 岡本八千代

私の「道後資料」の封筒から、漱石の「弟子あて、鹿児島で公開」の新聞の切りぬき（中日、2009年10月20日夕刊）が出てきた。

それは「吾輩は猫である」のモデルとされる飼猫の死を、弟子の野上豊一郎と作家弥生子の夫妻に伝えた自筆のがき（長谷川三千子さん提供）が鹿児島県薩摩川内市の「川内まごころ文学館」で公開されたものだった。

内容は、（1908年9月14日付）

○猫が「久々病氣の処、療養不<sup>あ</sup>相<sup>あ</sup>叶<sup>あ</sup>、昨夜いつの間にか裏の物置のヘツイの上にて逝去<sup>いた</sup>致<sup>せ</sup>候<sup>う</sup>」と始まり。

○埋葬は「車屋をたのみ蜜柑箱へ入れて裏の庭先にて執行<sup>ふみりそうふ</sup>仕<sup>し</sup>候<sup>う</sup>」

と報告したのだった。

○また、「主人三四郎」勢筆中につき、御会葬には及び不<sup>ふ</sup>申<sup>しん</sup>候<sup>う</sup>」

と、結ばれているのであった。

漱石は、当時四十一歳、その前年から晩年まで暮した東京の自宅「漱石山房」で書いたとみられ、のがきの内容は「猫の死亡通知」として、角川書店の漱石全集などに収められているという。

こののがきの出所は、野上夫妻の三男が保持しておられたものだった。

この公開展にはとうとう私は行けなかった。今にしてみれ

ば残念なことだった。以前、私の或教え子から、「坊ちゃん団子」のお土産をもらったことを思い出す。その時の嬉しかったこと……忘れない。

一度、道後の漱石と子規を訪ねてゆかむとして、新しい履きよい靴を新調したのであったが、とうとう体調をくずしてしまい、そのチョコレート色の靴も近所だけ履いて、時は過ぎ去ってしまった。

子規と漱石の生誕百五十年の記念の一年も忽ち来<sup>き</sup>・方<sup>は</sup>となってしまった。

しかし、私はこれからも子規と漱石のことにかわりながら、自分のことを考えてゆくだろうと思う。

そういえば今は、柿の時季だ。

◀柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺▶ 子規

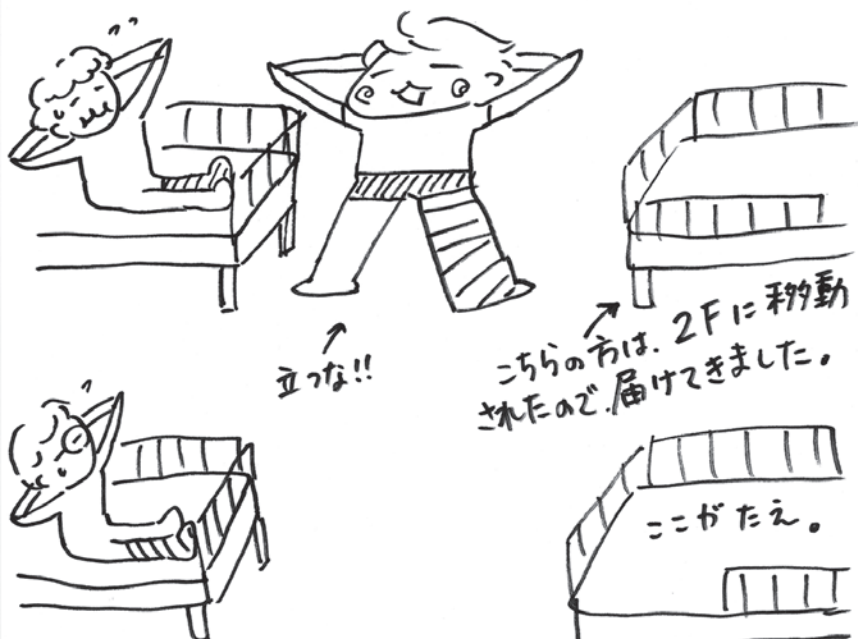
自然体で無理がない。漱石のことを「柿」というあだ名をつけたほどだ。子規と同じ年なのに、ちよつと自分（子規）の方が上のようなところがあつて、二人の友情はずーと続いていたのである。

将棋の羽生義治さんは、永世七冠を成し遂げられたというではないか。七冠は、竜王・名人・王位・王座・棋王・王将・棋聖の全てである。しかも二度も制覇したこととなるらしい。羽生さんの著書「(PHP)に、「自分にとつて一番いいと思えるものを簡単に、単純に考えることが出来れば……」と書いている。今の私の、暮してゆくうえでのモットーとしていることばでもある。心はいろいろに揺れつつ、だからおもしろいかも。

磯辺 耐

# みなさまへ⑦

ついにチューブが届きました!!



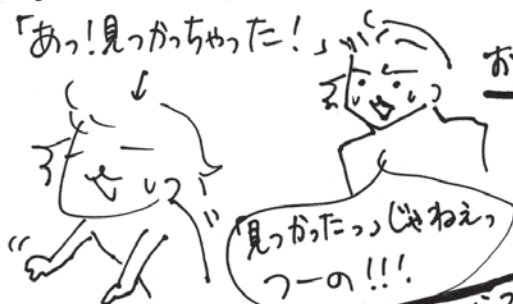
さっそく、みなさんで使ってみました!

「気持ちがいね!」と好評です。看護婦さんに変に思われないとイナ...と願っています。



# みなさまへ⑧

今日は、松葉杖もつかずに  
なんやがんやや、とるころに突然イケメン先生が訪れ  
「あっ! 見つかっちゃった!」



おこられます♡

毎日部屋に迎えにきます

今日も楽しい  
リハビリ♡

見つかっちゃった!!  
つーの!!!

膝につける装具もつけずに、3階から2階へ...



あ!! 先生、装具、忘れた!!



.... わたしも  
うっかりしました...

あ、  
しかも、ここまで歩かせて  
しまいました...

「いそべさんに、ふりまわされています」

ふりまわしているようです♡明日のリハビリもがんばり  
ます♡1日も早く、みなさまにお会いできますように...

## 編集室だより【二〇一七年十二月】

○寒くなる仕度をしなくてはいけない。エアコンとガスストーブとの併用で暮してきたけれど、思いついて、ガスストーブの使用を止めることにした。各部屋のエアコンのクリーニングとエアコンの新調とを頼んだ。事故の可能性をすっかり無くす。

○すみだ水族館へ、俳句の吟行。アットホームな愛らしいこの水族館が大好きだ。入り口近く、クラゲ・コーナーがあり、今日生まれたクラゲ、二日目のクラゲが：一週間目のクラゲと並んでいて、小さな点ほわたのクラゲが、全身で動いている様子：自らの命と重ねあわせてしまう。サカサクラゲの親から、枝(?)が生えて、その先に育つ途上のクラゲが付着している。大きさを増すと、離れて独立してゆく。こんな様子、いつまでも見ていたい。

○チンアナゴが海底の穴から、姿をのびし、引っこめ：。チンアナゴと目と目をあわせ、冬の目を、ぬくぬくと海の生物を観察出来る。ほんとに貴重なスペースでした。もちろん魚達との俳句ができたのでした。

○帰りがけ、スカイツリーの下、「梅園」で、栗ぜんざいをいただいた。もっちりとしたあたたかな栗の味、食感、漉し餡のやさしい甘さ。ほつととする。

○水族館ではないけれど、海ついでに思い出した。

チューブウーム、深海の熱水噴出帯周辺に生息する生物。硫酸化細菌と細胞内共生をして、硫化水素を取り込み、細菌に供給し、細菌は有機物を供給し：そんなところで、そんなことをして、250年以上、ほとんど不老不死状態とか。何ということ。

深海の珊瑚は、四千年も生きているという。どうして、四千年たつと死ぬのだろうか…。

○植村直己冒険館へ。

都宮三田線、蓮根駅より徒歩五分程のところ。世界を目指し日本から出掛けていった同士、懐かしく大好きな植村直己さんの記録が、やさしく、暖かく展示されている。ゆっくり彼とお話が出来たような、とても安心出来るスペースがうれしい。

○ときわ台の舟蒿山。

店内の石臼で自家製粉した手打二八蕎麦の、すばらしく美味しい店。蔵王地鴨の、それはそれは上品な鴨鍋をいただきました。いつもいつも「舟蒿山」へ行きたい！と思いついてしまうのです。

○二十数年続けて下さっているクリスマス・パーティー。裸婦クロッキーを描く友達です。最先端の食材で、最先端に料理してくださる。こんな友人のいる幸せを、毎年毎年、重ねてきて、また続けてゆきたい。

○駒込駅近く「和食・ひと塩」。

今年、何度目かの忘年会で出逢ったお店。素木の清潔な、清潔なもてなし。完全禁煙がうれしい。

寄せ鍋。うなぎ鍋、ぶどう鍋。あんこう鍋。鱈ちり鍋。すき焼。しゃぶしゃぶ。すっぽん鍋。その他、細やかな和食の数々…。

○二〇一八年も、しっかりお酒をいただいて、身も心も活発に生きてゆく。

○三河アララギ誌、諸先輩の残して下さいました歌集：随筆

：繻くにつけ、ありがたさ、懐かしさにあふれます。

現在も三河アララギ誌を支えていただいています皆様の作品を、「本」と出版出来ないものだろうか、この考えにつながるつもり、一年間の試みとして、三河アララギ誌を、図書館を中心に委託販売することに致しました。

事後報告になってしまいましたこと申し訳ありません。

## 野菜の花（20）

鈴木 孝 雄



○ インゲンマメ

インゲンマメには蔓ありと蔓なしがあるが、この写真は蔓ありの品種。種まきが秋になり、10月24日撮影。春から秋にかけ年に2度栽培できるのだ。5弁で15mm位の白い小さな花が次々と咲き、やがて2週間程でサヤインゲンが収穫できる。

インゲンマメの歴史は古く、7000年以上の前から中央アメリカやアンデス地方で栽培されていた。他の大陸に渡ったのははるか後、コロンブスがヨーロッパに持ち帰ったとされる。ヨーロッパから中国に、そして1654年明国の僧隠元が日本に持ち込んだとされる。隠元和尚はインゲンマメ以外にも煎茶、西瓜、蓮根、孟宗竹等をもたらした。

インゲンマメにはサヤ用と豆用がある。サヤインゲンはフランスで品種改良されよく食用されたことより、英語ではFrench beansあるいはgreen beanと呼ばれる。豆用インゲンマメは形が腎臓に似ていることよりkidney beanと称される。インゲン豆には色々な名前の品種があり、日本だけでも金時、白金時、大福、虎豆などが煮豆や餡原料に使われる。

インゲンマメ、殊に蔓インゲンの栽培は成長の過程を観るのが楽しい。種蒔から約10日で発芽し、芽は蔓となり、支柱に誘引すると左巻きでどんどん上に伸びる。花は下から咲きサヤは瞬く間に15～20cm長の摘み時になる。

「野菜の花」を書かせて戴いて2年弱、蔵が空になり本稿をもって筆を擱かせてもらいます。お陰で、私にとっては新しい発見があり、野菜栽培の多様さを学ぶ事が出来ました。

ご愛読有難うございました。

2018年2月1日発行

発行人 今泉由利

編集 今泉由利 森岡陽子

制作

三河アラギ発行所  
〒114-0022

東京都北区王子本町1-26-6A

TEL 03-5924-2065

http://maizumi.jp/

E-mail yurimaizumi@com.zaq.ne.jp

発行所

株式会社風詠社

〒553-0001

大阪府福島区海老江5-2-7-402

TEL 06-6136-8657

発売元

株式会社星雲社

〒112-0005

東京都文京区水道1-3-30

TEL 03-3868-3275

印刷所

株式会社桜創美

©三河アラギ発行所2018



9784434243363



1920092008007

ISBN978-4-434-24336-3

C0092 ¥800E

定価：本体800円＋税

発行 風詠社 発売 星雲社

## 明治神宮春の大祭奉祝献詠募集要項

一、献詠歌 未発表の近詠（一人一首厳守）  
紙 はがきに限る

献詠は楷書にて書き歴史的仮名遣を用いる（小・中・高校生は現代仮名遣）郵便番号・住所・氏名（ふりがなを付す）・電話番号・年齢を明記（小・中・高校生は、校名・学年も記すこと）  
平成三十年二月二十六日（月）必着  
阿木津英・小島ゆかり・篠 弘・穂村 弘  
（敬称略五十音順）

一、締切日 阿木津英・小島ゆかり・篠 弘・穂村 弘  
一、選者 阿木津英・小島ゆかり・篠 弘・穂村 弘

一、選歌発表 五月六日（日）歌会当日 於明治神宮参集殿  
一、賞 一般 特選 一〇名 記念品贈呈  
入選 二〇名 記念品贈呈  
佳作 一七〇名 記念品贈呈  
小・中生 秀逸作 若干名 記念品贈呈

一、送り先 〇一五一八五七渋谷区代々木神園町一―一  
明治記念綜合歌会係 電話〇三三三七九一五五一

一、献詠歌奉奠奉告式

1日 時 五月六日（日）午後零時三十分

2場 所 明治神宮御神前

一、第百三十八回明治記念綜合短歌大会

1日 時 五月六日（日）午後一時

2場 所 明治神宮参集殿

3歌会内容 入賞歌発表・表彰・選評

【講演】連統短歌講座（近現代歌人の家族詠 第一回）  
「石川啄木―家族の歌を中心に」

講師 小池 光氏

◎会費不要

☆来会者には作品集を贈呈致します。

☆作品集郵送ご希望の方は、切手三百円分同封の上お申込み下さい。

※特選・入選・佳作・秀逸作に入賞の方には短歌大会前に予めご通知致します

主催

明治記念綜合歌会  
電話 〇三三三七九一五五一